

自主シンポジウム 8

特別支援教育における児童生徒が 主体的に分かって動けて参加 できる授業づくり (3)

企画者	藤原 義博 (筑波大学)
	村中 智彦 (上越教育大学)
司会者	藤原 義博 (筑波大学)
話題提供者	松浦 隆史 (筑波大学附属久里浜特別支援学校)
	福元 康弘 (筑波大学附属大塚特別支援学校)
	浅川 義丈 (富山大学附属特別支援学校)
	村中 智彦 (上越教育大学)

1. 企画趣旨

知的障害・自閉症特別支援学校を対象に「児童生徒が主体的に分かって動けて参加できる授業づくりとその方法論の確立」について、①児童生徒が共に育ち合う協同的な学習機会を軸とした授業づくり、②協同的な学習機会を設定し展開するための観点や手だて、指導手順、その効果が話題提供を通じて検討された。

2. 話題提供

(1) 自閉症のある幼児同士のやりとり形成の指導手順 (松浦隆史氏)：自閉症幼児9名の朝の会で、幼児同士のやりとりや役割遂行の機会を設定した。おもな手だては、子どもがわかりやすく、動きやすい(動線に配慮した)環境の設定、手がかり教材の配置であった。子どもが自立的に役割遂行できるように、カードや物の受け渡し機会を設定し、それらの手がかりに気づかせ、扱い方を教えた。幼児同士のやりとりの形成手続きとして、①話し手と聞き手のやりとりがわかりやすい機会の設定、②最初は教師が話し手となって聞き手である幼児のやりとり行動を形成し、話し手の役割を幼児に移行する、③教師が受け手と送り手という幼児への支援を役割分担することの重要性を示唆した。

(2) 知的障害のある幼児のやりとりを促進するための手立ての検討 (福元康弘氏)：知的障害幼児の「朝のあつまり」の授業改善を行った。おもな手だては、物理的手がかりの改善に基づく役割活動の設定であった。改善手順は、①教師が教材教具を用いて行

っている活動を役割活動として子どもに移行する、②子どもが役割活動を遂行しやすい教材教具や物の配置を工夫する、③子どもが担う新たな役割活動を設定するであった。物理的手がかりの改善では「いつ」「なにを」「誰に」「どこに」「どうする」の観点や子どもたちの動線に配慮した。子ども自身が他児や教師に働きかける活動を豊富に設定する授業では、子どもの参加率が高まり、子ども自身の多様な活動経験を保障することを示唆した。

(3) 児童生徒がかかわり合い、協同的な学習を進める授業づくり (浅川義丈氏)：校内研修のテーマである「児童生徒が主体的に分かって動けて参加できる授業づくりのポイントや方法論」について、教員26名を対象としたアンケート調査が報告された。高等部情報科「インターネットのコミュニティに参加しようーネット社会のマナーを守って、情報発信ー」、高等部国語科「My レシピを作ろうーみんなが分かる説明文作りー」の授業づくりが報告された。授業改善の成果として、①発表し友達から修正を受ける、アイデアを提案してもらい、自分が気づかなかったことを相手から学ぶ様子が認められたこと、②教師からの評価だけでなく、友達との相互評価やインターネット上の評価など多種多様な評価を受けることが共に高めあうことにつながったことを示唆した。

(4) 知的障害特別支援学校の授業づくりにおける協同学習へのチャレンジ (村中智彦氏)：大学と知的障害特別支援学校との協同的な授業づくりを通じて、児童同士の協同学習の機会をどのように設定し、増やし、質を高めていくかのプロセスと条件、児童個々や集団の変容について報告があった。協同学習を成立させるポイントとして、①一方の児童のやりとり行動を指導者とのやりとりで先に形成しておくこと、②指導者とのやりとりで形成された手がかりを生かすこと、③一つのやりとり機会が確実に形成されてから次のやりとり機会の設定を行うこと、④話し手と聞き手の両方を同時に教える場合にチームティーチングの役割分担で指導を行うことの重要性を示唆した。